

# 言葉と文化（I）

## “あいまい”をめぐって

### Language And Culture STUDY ON “AMBIGUITY”

(1998年3月31日受理)

浦上典江  
Fumie Uragami

key words：あいまい，日本語・日本文化，英語コミュニケーション

## はじめに

来るべき国際化時代をにらんで、教育課程審議会は中間まとめにおいて、中学校では外国語を週3時間の必修と2時間の選択にして、最大限5時間まで学べるようにすること、また小学校でも「総合的な学習の時間(仮称)」に外国語会話などの学習ができるようにする事を提言した。また、同審議会の高校教育課程分科審も、現在選択教科の外国語を必修教科とすることで大筋合意した。(1998年5月)。指導についてその素案によると、言語の現実的な使用を念頭に置いた実践的なコミュニケーション能力の育成を図るために内容を改善する事が必要という。外国語と言えば、それは総合的な言語教育であり、将来、国際社会で通用する者を育成するための言語教育である。それを仮に国際人とよぶなら、国際人とはいかなるものであろうか。わたしは次の3点だと思う。

1. 言葉と心を使って、言語も文化も異なる人同士でコミュニケーションをしようと努める者。
2. 異なった言葉と文化を尊重出来る者。同時に母国の言語を客観的に言葉として理解し、適切に運用でき、その文化に誇りをもつ者。
3. 人類的課題(global issues)の解決に役立とうと努める者。

すなわち、言語教育では、諸説あるが、私は母語の認識と正しい運用の教育が重要であると思う。ということは、単に言語の4技能 聞く、話す、読む、書く、だけの技能教育ではなく、受信と発信によってコミュニケーションを行う能力を養う教育である。母語とその文化の正しい理解と運用の教育が、言語教育の基礎にならなければならない。欧米では、このことは何百年も前から、必要上かなり自然に行われて来ている。イギリスでは、特に近年のcultural studyの研究の進歩は目覚ましいものがある。同国の最近の調査では「識字に困難を覚えるもの」が、実に10人に1人おり、中学校で週5時間の英語教育が必修として行われている。国際化発展途上国と言われる日本の将来の為に、学校教育において、日本語を国語としてではなく、日本語として、客観的に他の言語と

の比較において指導したり、日本文化との関係において指導することが必要だと思う。実はこのことが、国際社会に貢献する者の育成において重要な事の一つなのではないだろうか。私はここで以上の観点から、日本語と英語についてしばしば比較していきたい。もちろん、文化相対主義の立場でも、自民族中心主義の立場でも反文化相対主義の立場でもない、どちらかと言うと、言語相対主義の立場といっても構わない。

本稿ではまず日本語の特色と言われる“あいまい”をとりあげていくつかの角度から眺め、英語“ambiguity”との違いを探り、これが日本文化の中で果たしている役割や、あいまい文化と言われる、言葉によるコミュニケーションの育ちにくい日本文化の特質を掘り下げ、できればその解決を探り、日本人の国際社会への道を考えていきたい。なお、本稿は1975年に、小説を中心にして、日本文化と欧米文化の特徴を考察し、言語と文化の関係を追った小論「言語と文化—小説を通しての考察(1)—」<sup>1)</sup>に続くものである。

## I

現在、科学の世界にはファジー理論なるものがあって、漠然としたファジーなものに論理性を与え、今やそれがさまざまな電気製品にも応用されている。もとは二値論理を発展させ、0と1の間の連続数値を与えることで真偽の程度に幅をもたせた数学理論で、視覚情報処理や種々のシステム制御などに応用されたのが、次々に広がっているのである。1965年のZadehの論文が最初と言われる。日本では1972年にファジーシステム研究会が発足し、シンポジウムも開かれている。ファジー理論はまた、最近心理学などの世界でも、評定に幅をもたせた回答法を使う“ファジー評定法”などとして用いられている。竹村和久氏は「意志決定の心理」<sup>2)</sup>において、性格や就職先や、結婚相手などの刺激に対する反応を、ファジー評定尺度によって測定し、分析検討している。また、本学の近藤信子氏はその共著「服装評定におけるあいまいさの検討」<sup>3)</sup>において、数種の服装を刺激として用い、それらのイメージをファジー法と従来のSD（セマンティック・ディファレンシャル）法を用いて測定し、両評定値を比較して、“服装評定のあいまいさ”を検討している。ファジー理論はあいまい理論と訳されてはいるが、一般的には“あいまい”と“ファジー”はちがったイメージをもっている。「服装評定におけるあいまいさの検討」でも結論として、服装評定において、SD尺度の測定値の標準偏差値をその評定のあいまいさ、不正確さとみなすことはできない<sup>4)</sup>と述べている。ここでは“あいまいさ”は“不正確さ”とほぼ同様の意味合いを持たされている。

広い意味のあいまいさはどの言語にも、どの文化にも、どの分野にもあるのだが、日本語の“あいまい”という言葉は、どちらかというマイナスイメージで使用されることが多く、しかも日本人や日本文化の特質を表す言葉と考えられている。

例えば、最近の新聞に目を通すと、見出しに使われたものだけでもすぐ2本見つかった。

雇い下手な日本人 あいまいな態度に反感

山陽新聞 1998年2月3日

「タイ 近い国」という、タイの事情について書かれた記事の見出しである。タイの日本人駐在

員の8割以上が、メイド（通称アヤさん）を雇っているが、雇い方が下手だという内容である。理由は日本人のあいまいな態度にあると言う。慣れていないから妙にへりくだって言うべきことがはっきり言えなかったり、ばかにされまいとつけけんした態度をとり、反感を買ったりする。場面場面で変わる日本人の雇い主としての態度は、他の国から来ている駐在員にくらべてあいまいで一貫性がなく、高い給料を払っているにもかかわらず不信感を抱かれているというのである。

「あいまいさ抱えきれず」 毎日新聞 1998年2月1日

子どもや家族の相談機関「フレンドスペース」顧問の富田富士也氏の言葉である。

「相談室を訪ねて来る子どもたちに共通しているのは、コミュニケーションがうまくとれないということです。人間関係は特に、あいまいでわずらわしいものですが、それに耐え切れな

い。《略》あいまいさを自分の中に抱えきれないのは、こういう感覚があるからだと思います。《略》あいまいさを許し、相手をまず受け入れるというのは難しいのですが、私は相手の言うことに一呼吸おいてから返事をするという、ちょっとした工夫から始めることにしています。」

続けて3月11日の山陽新聞には見出しではなかったが、人目をひく記事があった。ナイフを使った中学生男子生徒同士の傷害致死事件についての記者会見において、記者が「前日校長は刺した生徒には学校内外で問題行動があったと話したが、どのような問題行動だったのか」と質問したが、校長はあいまいな返答しかしなかったというのである。

ちょっと新聞をのぞいただけでもこれだけある。いわんや日常会話の中では、“あいまいにしか覚えていない”，“あいまいな態度”等という言葉以外，“なんだか”，“みたい”，“ぼつぼつ（ぼちぼち）”というような類義語もしくはあいまいさを表す表現方法、態度、行動は、際限なくある。何かの勧誘に対して“考えておきます”とその場逃れの返事をするのもそれである。それだけではない、とくにボカすつもりはなくても、はっきり言うのは何か相手に対してきつい感じにならないかと、あいまいに言う例も多い。たとえば、旅館を予約する際によく使う「5人ほどお願いします。」という表現は英語に訳せそうで訳せない。「女のくせに。」「言ったくせに。」「知らないくせに。」も否定を含ませたあいまい表現である。たった今もテレビをつけると画面一杯に顔が写った橋本総理が「・・・を否定するものではありません。」とまじめな顔を話している。これも英訳の難しいあいまい表現の1つである。否定しませんとはっきり言わない所がまさに日本の政治家である。先日テレビのワイドショーでも司会者が「日本の政治家がアメリカに次々に出かけて行って英語でスピーチすると、内容がはっきりして我々にもよくわかります。英語ではあいまいな表現ができないから、日本語のようにボカせないんですね」と言っていた。また、何かを頼まれると、「やれるかやれないか分かりませんがやってみましょう」とあいまいに答えたりする。謙遜のつもりであるが外国人には通じない。「やるのかやらないのかはっきりしろ」と言うことになる。また、「怒っているのか、笑っているのか、悲しんでいるのか分かりにくい表情」というのも独特と言われる。欧米が発信に力を注ぐ文化なのに対して日本は受信に力を注ぐ文化で受信体が敏感であり過ぎるため、相手（受信体）の反応を考え過ぎ、自分に対する自己規制を強め、受信者側からの過大評価や過小評価に異常に神経を使い、言葉によるコミュニケーションを避けることになる。はっき

り表現しないことを“あいまい”と定義すると、日本人はあいまいのかたまりということになる。

日本語が、主語をはっきりさせず語順があいまいなもの、相手に判断をまかせる、あるいは、相手の反応次第で内容まで変える事が可能なあいまいな言語だと言われる根拠となる。

また、短歌、能などは、はっきりした表現をせず（俳句は季語が有る分、短歌にくらべ、かなりはっきりしていると考えられる。）、または言葉や表現を省略して、受ける側の判断にまかせるところがある。これもあいまい文化は受信文化だと言われるゆえんである。

では、あいまいは外国語や外国人にないのかというと、かなりある。たとえば、Henry Jamesはアメリカとヨーロッパにまたがる小説では、ambiguous や vague を多用する事で知られている。また、1950年代に活躍したイギリスの詩人William Empsonの詩には謎めいたあいまいさが連なっていた。また彼は批評家として「あいまいの七典型」を著したことで知られている。しかしながら、ものごとが論理的なことに価値を置く社会と、むしろあまり論理的な事は嫌われる傾向にある社会とでは、あいまいさにたいする評価が著しく変わって来るのは当然である。

## II

私がそもそもあいまいと言う言葉と日本文化を関連させて真剣に考えるようになったのは3年前にさかのぼる。ある日、外国人にヴォランティアで日本語を教えていたとき（中級クラス）、「こ、そ、あ」の問題になり、中国人のAさんが日本人の「こそあ」の使い方はあいまいだと言った。確かに中国語や英語にくらべて日本語のそれはあいまいである。そしてインド人のBさんがあいまいは何かときくとAさんは『『けっこう』のように「はい」か「いいえ」かわからないいいかたです。日本人はあいまいが好きです』と言う。「Aさんはどうですか」とたずねると「嫌いです」と即答。「お世話になった日本人のともだちに『家に来てください。ごちそうしたい。』と言ったら、『ありがとう』と言いました。でも来ませんでした。なぜ、NOと言わなかった?』怒気さえ含んだAさんの発言に同調を示す皆の食い入るような視線にたじろいだ程だった。アメリカ人のCさんがよく理解できないようで「英語で何?」と聞くと、日本滞在7年のイギリス人のDさんが“ambiguity”と答えて、その場をとりなすように静かに話し始めた。「あいまいは良い時と悪い時があります。良いときはpoliteな場合です。でも、私の家に日本人が来た時、紅茶とコーヒーとどちらがいいか聞いたら、『どちらでも』と言いました。これはimpoliteです。とても困ります。それからぶるぶる震えたので『どうしましたか?』と聞いたら『べつに』と言いました。でも本当はトイレに行きたかった。」日本人のあいまいさは大爆笑の種となってしまった。

授業後、片付けをしながらまわりの日本人の先生達に授業中の質問について話し、「あいまいってどう思う?」と聞いてみた。するとそこにいた5人全員が「外国人には分かりにくいとは思うけど、相手を傷つけないという日本人の思いやりじゃないかな」というような返事をした。その後、他の人々にたずねてみたところ、同じような返事が多かった。逆に、外国人からは大抵否定的な返事が返って来た。そして、あいまいさが日本人の文化であり、美しさであり、心であると思っ

ている日本人が多いこと、逆にあいまいさは日本人のずるさであり、論理性のなさであると考えている外国人が多いことがはっきりして来た。さらに調べていくと日本語や日本文化関係等の本の多くにこのことが、日本人だけでなく、外国人によってもとりあげられており、日本文化の多重構造との関係や日本人のDNAからも追求されていることがわかった。

そこで、私は1996年から1997年にかけて数回アンケートをとってみた。ここでは本稿の主旨上、

そのアンケートの中から本学の英語英文科の学生220人と、岡山県国際交流協会で日本語を学ぶ外国人50人を対象としたものを紹介する。しかし、言葉や理解度にちがいががあるので質問の形式等を変えた為、大体の傾向は分かるが外国人と日本人の比較にはなっていない。

単位：人

	+	±	-
あ い ま い	22	134	64
フレキシブル	203	16	1
フ ァ ジ ー	101	72	47
ア バ ウ ト	22	151	47

日本人対象の場合は、「あいまい」と言う言葉だけでなく、それに近い他の言葉も加えて、プラスのイメージを+、マイナスのイメージを-、どちらともいえないを±できいてみた。

これは学生対象だった為か、また他の言葉も列記した為か、「あいまい」についてマイナスイメージが強かった。ここでは紹介を省いたが日本人全般のアンケートでは、40才以上では、あいまいを「日本人の奥ゆかしさ」「思いやり」「やさしさ」「柔軟性」「ゆとり」「ふくみ」などと考えているものが多く、ひとしきり、日本文化論に話の花が咲く。その反面、「電車の時間なんか厳重なのに、事故が起きると責任はあいまいになるんだからおかしい」とか「政治家の発言のあいまいさは責任逃れにしか考えられない」などと、社会問題に話が膨らんで、今度はあいまいさの問題点が続出してくる。逆に30才以下ではマイナスイメージが強いが、関心は薄い。

外国人50人（中国人11人、アメリカ人4人の他、カナダ人、オーストラリア人、イギリス人、韓国人、インド人、ヴァングラデシュ人）の場合は、日本滞在1年以上、初級以上のレベルに限って、「あいまい」と言う言葉についてだけ、+か±か-かをイメージとして聞いてみた。意味を理解しにくい場合も訳語を出さず、できる限り例で示した。その例を聞きながら彼らがvaguenessとかambiguityとかequivocalなどと訳しているのは放置した。また中にはあいまいはvagueかambiguousかと熱心にたずねてくる者もいた。その結果、31人はほとんど間髪を入れずに、13人は暫く考えてから「-」と答えた。6人は「+の時と-の時があります。」で、±はなかった。日本人のあいまい観に関してもあまり共感を感じていないことが分かった。また、外国人に日本語を教えていてつくづく思うのは、日本人との論理性の違いである。国立国語研究所所長の水谷修氏は、日本語は信号にたとえれば、赤でもなく青でもない黄色のようなものだという。また、次のようなジョークも知られている。日本の企業の幹部と米国の企業の幹部の話し合いの場で、米国側が「Yes or No?」と詰めよると、日本の幹部2人は額を寄せて相談したあと声を揃えて「or!」と答える。ジョークだがまじめに考えると奥が深い。又、石原慎太郎の「ノーと言える日本」がかつて評判になったが、あれは主に“対アメリカ”である。奥は深くない。それより、言葉を尽して

コミュニケーションをはかる国際社会への道を考えた方がよっぽど良い。日本人は言葉の使い方をあいまいにして、言葉と文化の相互作用によるあいまいさの中にかどっかり腰を落ち着けているのだろう。比喩的に考えれば、その態度は社会生活の中で青（安全）とも赤（危険）とも言えない黄（要注意）状態なのである。

### III

あいまいという語彙はどういう言葉なのか。ambiguityと併せて5種類の辞書の紹介をする。

◎日本語語源辞典 村石利夫 日本文芸社

はっきりしないこと、確かでないこと、まぎらわしいこと。あやふや。いかがわしいこと。疑わしいこと。「あいまい屋」「あいまい女」

文例 「・・・なにもかもはっきりとした矩形か円形をなしてあいまいな形をしたもの一つもなかった」 堀田善衛 『灯台へ』

語源 漢字からの借用で、曖には覆われて暗い、昧にも暗黒である、道理に暗いの意があるので上下同意。曖昧模糊の成句も作る。

◎字通 白川 静 平凡社

かすんで定かでない。ことの理否が明かでない。

晋書杜預伝 臣の心實（まこと）に了（さと）る。敢てあいまいの見を以て、自ら後の果（わざは）ひを取らず

◎日本語大辞典 梅棹忠夫 金田一春彦 阪倉篤義 日野原重明 講談社

（形動）① はっきりしないさま、あやふや、ambiguity （対義）明白、明確

② うしろぐらいさま being suspicious

③ いかがわしいさま questionable 用例一や

◎類語辞典 広田栄太郎 鈴木裳三 編 東京堂出版

不定、不確、不明、不明朗、不分明、有耶無耶、あやふや、いいかげん

（古）おぼおぼし

◎DICTIONARY OF ENGLISH ETYMOLOGY edited by YOSHIO TERASAWA THE KENKYUSHA

ambiguous 《c1485》曖昧な、多義の ME-L ambiguus, unsettled, uncertain（原義）go about vague 《c1548》漠然とした、曖昧な F vague-L vagus indefinite, wandering

あいまいのついた語の例としては次の2語がある。

あいまいや：明治時代の秘密売春宿。表向きは料理屋などを営み、裏で売春のあっせんや場所の提供を行った。

あいまい母音（schwaまたはobscured（indeterminate）vowel）：自然母音，中立母音ともよばれ

る。舌も唇も力を抜いた自然の状態での発音。

あいまいの意味は上記のようなものであるが、日常生活に多用され、しかも理解のあいまいさを実感させる語を集め、日本語が共有しているあいまいさを、さまざまなレベルや角度から眺めた辞典がある。「あいまい語辞典」である。あいまい語辞典には“相変わらず”から“割合”まであいうえお順に231語の解説とコラムがある。その中に「あいまい表現の語源」というコラムがあるので少々長いが引用する。

「曖昧」は「曖」も「昧」も「暗い」という意味。「曖昧模糊」という時の「模糊」は霧や煙などがかかった状態のことを言う。つまり「曖昧模糊」とは暗かったり、霧がかかったりして物の輪郭が定かにつかめないことをさしている。まさに「分けられる」ことが「分かる」ことなのだ。

「そんなあいまいな（あやふや）な返事では困る」では、「あいまい」と「あやふや」はほぼ同じ意味だろう。例えば、原発に賛成か反対かの問いに対する返事だとしよう。「あいまいな返事」とは、賛成か反対かの輪郭をぼかした官僚的な答弁を思わせるのに対して、「あやふや」の方は賛成とも反対ともとれるどっちつかずの、論理的な一貫性のない政治家のその場しのぎの対応を思わせる。

「曖昧」が「暗さ」によって、物事の形を隠すことに本義があるとすると、「えたいが知れない」という表現の「あいまいさ」の由縁をもつかめてくる。「えたい」とは「得体」ないしは「為体」と書く。つまり「体（形）を得る」「体（形）を為す」という意味である。「えたいが知れない」とは、そのものがそれとして「体を得る／為す」ところの「正体・本性」が「知れない／わからない」ということなのだ。ここにも、「形」を見てとることが「分かる」という発想になる。

「お茶（言葉、態度）を濁す」が「あいまい」さを表しているのも、「濁す」ことが透明な状態を不透明にさせることだからだろう。それにしても、どうして「お茶」なのだろうか。お茶が大変貴重だった室町時代には、お茶は最高の接待として交渉相手をまるめこむことができたことから、「急場をなんとかしのぐ」ことを「お茶を濁す」と言うようになった説と、茶道の作法にかなってない、いい加減なやり方でとりつくろうことから来ているという説がある。いずれにしても、どうしてお茶を「濁す」なのか、という疑問が残る。

日本の政・官・財の鉄の三角形の理不尽な癒着ぶりがさまざまな領域で露呈し、国民の怒りがかっているが、そうした癒着の土台をなしているのが接待で培われた相互の「なあなあ」の関係である。この「なあなあ」は、歌舞伎の舞台上で役者が相手の耳元でさっさやく場面の終わりに「なあなあ」というのがキマリだったことに由来している。ここから、事態を公開してはっきりさせず、内輪であいまいなままになれ合って物事を進めていくことを「なあなあでやる」というようになった。<sup>5)</sup>

## IV

あいまいについて、今しばらく文献を掘り下げて行くには、まず大江健三郎の「あいまいな（アソビギョアス）日本の私」を取り上げない訳にはいかない。

これは1994年にストックホルムで行われたノーベル賞受賞記念講演の題名であり、その30年前に同じ場所で行われた川端康成の「美しい日本の私」と言う題名の講演を踏まえたもの、あるいはそのパロディーとも言ってもよいと思う。まず彼は、川端が行った講演を「あいまいな」という語でとらえ、それを“vague”という訳語で説明する。

日本語の作家として、初めてこの場所に立った川端康成は、「美しい日本の私」という講演をしました。それはきわめて美しく、またきわめてあいまいな(ヴェイグ)ものでありました。私はいま vague という言葉を使いましたが、それは日本語でのあいまいなという形容詞にあてたものです。それをここで念を押したいのは、あいまいなという日本語を英語に訳す場合、いくつもの訳語が考えられるからです。川端が、おそらく意識して選んだあいまいさは、その講演のタイトルがあらかじめ示していました。それは日本語で「美しい日本の」という、その助詞「の」の機能によっているのです。<sup>6)</sup>

次に大江は「あいまい」をambiguousと訳して自分自身について述べていく。

このような現在を生き、このような過去にきざまれた辛い記憶を持つ人間として、私は川端と声をあわせて「美しい日本の私」ということはできません。さきに私は、川端のあいまいさについていながら、vagueということばを用いました。いまわたくしは、やはり英語圏の大詩人キャスリーン・レインがブレイクにかぶせた《ambiguousであるがvagueではない》という定義にしたがって、同じあいまいなという日本語をambiguousと訳したいと思いますが、それは私が自分について、「あいまいな(ambiguous)日本の私」というほかにないと考えるからなのです。

開国以後、120年の近代化に続く現在の日本は、根本的に、あいまいさ(ambiguity)の2極に引き裂かれている、と私は観察しています。のみならず、そのあいまいさ(ambiguity)に傷のような深いしるしをきざまれた小説家として、私自身が生きているのでもあります。<sup>7)</sup>

あきらかに大江にとってあいまいさは負である。それは次の文によって明かされるのである。

一方、日本の経済的な大きい繁栄は一世界経済の構想に照らして、また環境保全の側面から様ざまに危険の芽をはらんでいるはずですが一、日本人が近代化をつうじて慢性の病気のように育ててきたあいまいさ(ambiguity)を加速し、さらに新しい様相をあたえました。それはわれわれが国内で自覚しているよりも、国際的な批評の目には、さらに明らかですらあるのではないのでしょうか？<sup>8)</sup>

ここでは、あいまいさの対義語とも言える、あきらかという言葉の使用で、大江の言わんとする



ことが明らかになっている。

さらに大江は、望ましい日本人像について、「あいまいな（アンビギュアス）日本の私」という自己規定の意味を明確にするため、その対比として、ジョージ・オーウェルがかれの愛する人間の性格を表すものとした、“humane”，“sane”，“comely”，などと併置されるものとしての“descent”を挙げている。それで、大江は、われわれが外から眺められている在り方と、内においてそのようでありたいとねがっている在り方との、あからさまなズレも明確になると考えている。河合隼雄は「日本語と日本人の心」の中で、この「あいまいな日本の私」に触れ、

大江さんは「あいまいな日本の私」という言い方をしておられますが、これは片子だと私は思いました。つまりこちらでもないあちらでもない、こちらでもあるあちらでもあるというそういうなかに生きている日本の私です。これを「私」と書かないで「日本の私」と書いておられるのは、私の考えでは、日本人全体がこれを背負っている、そして全体のなかの一人として、自分は生きているという、そういうことだと思います。

そして、この「あいまいな日本の私」を拝読すると、すごく心に残るところがあります。<sup>9)</sup>

大江は受賞の1年半前、1993年5月25日にニューヨークのパブリックライブラリーで行った講演「回路を閉じた日本人でなく」において言っている。

日本語の作家として初めてノーベル賞を受けた川端康成（1899—1972）は、ストックホルムで「美しい日本の私」という受賞講演をしました。それはじつに美しいものです。同時に、まことにあいまいなものだともいわねばなりません。しかもその美しさが日本的であるように、そのあいまいさも確かに日本的だと思います。

いま私があいまいさと英語に訳して語っている日本語の形容詞は、「あいまいな」です。「あいまいな」は、大きい和英辞書を見ると次のような英語の形容詞におきかえられています。vague；ambiguous；obscure；equivocal；dubious；doubtful；questionable；shady；non-committal；indefinite；hazy；double；two-edged.

日本人は「あいまいな」というひとつの形容詞を、これだけ多様な意味に使い分けて暮らしているのです。つまりわれわれは、きわめて複雑な言語生活を持った国民だということができるとおもいます。せんだってクリントン大統領が、エリツィン大統領に、一日本人はNOと言う意味でYESということがあるから、気をつけるように！と助言しました。あるいはその逆だったでしょうか？それは新しいアメリカ大統領に好意と期待を寄せている日本人に対しても、その自尊心を傷つけたと思います。もしクリントン大統領が、この「あいまいな」という日本語の形容詞を使っていたとしたら、物議をかもすことはなかったのではないかと一日本人の約束は「あいまいな」ことがあるから、気をつけるように！

これはさらにきびしい批評ですが、それが事実であることを認める日本人はすくなくはないはずだからです。

川端さんの演説のあいまいさということは、私は悪い意味でいっているわけではありません。

それは doubtful だったり questionable だったり shady であったりはしません。しかしそれは  
おおいに、vague であるし ambiguous であるし obscure でもあると私は感じます。<sup>10)</sup>

かなり長い引用になったが、英語で行われた欧米人対象の講演の日本語訳であるので、あいまい  
さの問題点が絞り込まれており、わかりやすくなっている。

さらに大江は川端がいくつも古典の歌を具体的に引用しながら西欧の聴衆に向かって語りかけて  
も、実は川端自身に、西欧、アメリカに向けて語りかけているという認識はなく、「美しい日本の  
私」に向かって語りかけていたのだと言う。大江によれば、川端にとっては「美しい日本の私」に  
向かう閉じられた回路の中のモノローグこそがその文学であり、夏目漱石の文学でも、西欧を追い  
かけて急ぐ近代化がすぐにも行きづまることを予感している「苦しい日本の私」である登場人物と  
作者の悲痛な対話がその実態であり、自分の落ち込んでいる閉じた回路を決して開こうとせず、  
「あいまいな日本の私を」西欧に向かって語ろうとしなかったと言う。そして、夏目漱石から三島  
由紀夫、安部公房まで日本の近代、現代文学は欧米から影響をこうむってきたが、欧米に正面き  
つて向かい合う仕方では、日本と日本人を語ることはなかったと考える。世界に向かって開いた文学を  
作り出す意志を積極的に固め、日本文学を多様性で沸き立つ物に鍛え直すことが「あいまいな日本  
の私」でなくなることだというのである。日本人のあいまいさを切り開くのは、内部からではなく  
外部からかもしれないと言うのは、この講演がアメリカでアメリカ人対象に行われた為の一種のリ  
ップサービスだと考えたい。

## V

大江健三郎のように、あいまいさを否定的かつ論理的に論じている例は探せばキリがないほど多  
いが、言葉と文化に関連したものに限っていくつか挙げてみる。

### 1. 「心を結ぶ日本語」 古谷和雄 講談社<sup>11)</sup>

外国人がみた不思議な日本語というタイトルの章において、外国人は日本語にあいまいな表現  
が多いことに戸惑っていると言う。その中から次の例を挙げてみる。

#### ① 「けっこうです」はイエスカノーか

あいまいの代表とも言える「けっこうです」を使うとき、日本人はそれとなく相手に分かっ  
てもらおうとしていると言う。外国の人の多くは、言葉を使って事柄そのものを伝えようとす  
るが、日本人はむしろ気持ちを伝えようとすると言う。日本にははっきりし過ぎない方がいい  
とする価値観があるという。しかし、お互いを分かりあった日本人同士なら、あいまいでも成  
り立つ関係があるわけだが、外国人とのあいだでは、そうはいかなくなってくる。

#### ② なぜ断りきれない、悪質商法

悪質商法を断りきれないで大変な被害にあうのもあいまいに相槌を打ったのが原因であるこ  
とが少なからずある。「ちょっとおかしかったらやめよう」などどあいまいな気持ちでいると

言葉まであいまいになる。悪質商法を見ていると、気持ちのあいまいさだけでなく、言葉の使い方のいまいさを逆用されることすらある。他人を信用してはいけないということは大変悲しい話だが、お互わりあっていない都会の人間関係の中ではあいまいな言葉遣いは避けなければならない時代になってしまったという。

③ ディベート・激論番組はなぜ受けたのか

日本のテレビで最近流行といえるほど増えてきた「ディベート番組」について触れている。誰かが発言している最中に話に割り込んだり、揚げ足を取ったり、突然怒りだしたり、とても話し合いと言えるものではなく、不愉快にさえなるという。あいまいさの中に心地よく浸っている日本人にはなかなかこなしきれないが、論理性を重んじ、小さい時から論理性を鍛え上げる教育をしているアメリカなどのディベートをみていると、非常におもしろくスマートである。よく聞いていると、非常に良いタイミングで話の中に入っていき人があるものである。逆に、話し始めたものの、意見がまとまらずあいまいになってしまい、あっと言う間に誰かに話を取られてしまう人もいる。これは真剣勝負である。まず自分が一番言いたいことから話しはじめて、相手を納得させる。あいまいさはいっさい許されない世界だ。この論理的な話し方という点は日本人に欠けているだけに、感心させられることがあるという。

2. 「閉ざされた言語・日本語の世界」 鈴木孝夫 新潮選書<sup>12)</sup>

鈴木孝夫も日本語のあいまいさをしばしば取り上げている。この本の中でも、日本人の論理的考えそのものがあいまいなのであるから、それを英語に直したら論理的になるかといえば、とんでもないと言う。彼は科学雑誌「自然」の昭和49年1月号に「ロゲルギストK2」という名で掲載されている（「であろう」の背景）という題のエッセーを引用して、ことばそれ自体、文章表現そのものに対する日本人の考え方を変えなければ、どこの国の言葉を使っても、論理的に支離滅裂なことしか言えないことを明らかにしている。同時に、私たちは日本語の曖昧さ、晦渋さに酔い、それを誇る気持ちさえ持っていることも否定できない事実であるという。

3. 「ことばはこころ」 外山滋比古 講談社<sup>13)</sup>

外山滋比古もあいまいさについてよく触れる。英語でもありのままをそのとおりに言うのを、スピードをスピードと呼ぶと言って避け、より上品な、差し障りのない言い方へ移して表現するのが、センスのある人たちが自然に考えてきたことであると言う。あからさまを避けぼかした言い方をする一種の婉曲表現の効用を認めながらも、こちらのことをよく知らない相手には、ぼかした言い方は通用しない、野暮ったくとも、誤解されないように、スピードをスピードと呼ばなくてはならないという。大事なことを後へ持ってきて、はじめの言葉をいくらかあいまいに用いるという表現方法は互いに気心が通じている時のものである。もし対立した関係にある相手に対して、同じようなことを言っていると、とんでもないことがおこると戒める。実際、“あいまい”をめぐる、あいまいな言葉を気を許して使っていると悲劇とも喜劇ともつかないことが、アメリカ人と日本人の間では頻繁に起きる。内々の人間相互の間の含みのあるやわらかな話し方と、改まったあるいは事情のよくのみこめない人とのやりとりは違った表現をしなくてはならないと

いうことを、国際化社会の中にあって学び、堂々とコミュニケーションを成立させていきたいものである。

否定的な使い方の例を少し露骨なものを含めてさらにいくつか挙げてみる。

4. 「日本人の本音 ずるさ学」 阿部昌子監修 阿部数利著 こうふく社<sup>14)</sup>

「あいまい日本」と「象徴天皇」という項において著者は、ひとつの儀式にしても法があいまいにされたまま、「国民の気分」と完全に遊離した「象徴天皇」と「あいまいな日本国家」がどこかに流れていると言う。

5. 「金教授の日本談義(イルボンイヤギ)」 金鉉球 桐書房<sup>15)</sup>

あいまいと言う言葉の使い方をみる為、「あいまいな日本人」という項の最終部分を引用する。

ところが、もんだいは、あいまい極まりないこの答弁を聞いて質問をした記者をはじめとして、すべての記者たちが、よくわかったというように、誰もそれ以上質問しなかったことだ。さらにあいまいな答弁をした村山総理も、これ以上どんな質問があり得るのかという態度で、堂々と記者たちを見回したのだった。

進歩的だという社会党の総理であれ、質問を職業とする記者であれ、敏感な問題をあいまいに処理しておいて通り過ぎていく日本人の枠から脱け出すことはできないんだなあというおもいととも、ふと1994年にノーベル賞文学賞を受けた大江健三郎が受賞記念講演で使った「あいまいな日本人」という表現を思い起こしていた。

6. 「がんこな中国人 あいまいな日本人」 孔健 PHP<sup>16)</sup>

孔子の第75代直系子孫と言う著者の本書では、とりたててあいまいについて取り上げているところはないが、中国人と日本人の自然に対する対処の仕方の大きな違いを取り上げ、中国人と日本人がより良いコミュニケーションを成立させるにはどうしたらよいかを述べている。中国人にとって、自然は闘うべきものという考え方が強い。母なる黄河とは言うものの、この母は極めて厳しい母なのだ。一方日本の自然は豊で優しい。水害などの被害はあるが、中国ほどではない。日本人は自然を怒らせないようにし、中国人は怒れる自然とどう対処していくかを考える。日本人は、あいまいさを日本の文化と考えどちらかという美しいものと考える反面、時間などには極めて厳格で、スケジュールには変化があってはならないという考えでいる。万が一の変化があったときは個々の責任は超越してしまっているというところがあいまいなのである。中国人はスケジュールは常に狂うもの変化はつきものと思っており、その変化をどう捉えていくか、対応していくかが大切だと思っている。したがって人間関係においてもしかりで、その問題は個対個のきっぱりしたものだという。日本人は相手と話すときに相手の目を見ずに、口の辺りをあいまいにみるのがよいとされる。中国人は相手の目から心を読みとろうとする。この点は初対面のeye contactを非常に大切にしている欧米とよく似ている。多民族国家で共通しているのが興味深い。日本ではこれまで「一を聞いて十を知る」とか「以心伝心」などという言葉があるように、阿吽の呼吸によってコミュニケーションをはかることがあった。やはりどこをどう捉えても日本はあいまい文化なのである。しかし中国人と付き合う場合には、はっきり自分の意見を言わず、自分

自身のことも語らないのでは、その先付き合いがむずかしくなる。

7. 「アメリカ人から見た日本人」 ジョエル・シルバースティン ごま書房<sup>17)</sup>

日本人が日本人だけの“なあなあ”の社会でぬくぬくと生活できた幸せな時代はとくに終わりを告げている。誰にでも説明できるロジックを持ったときこそ日本社会が大人になったと言える。また、彼は日本のマナーやルールというのは一人一人にあるのではなくて、あるエリアにあるのではないかという。<sup>17)</sup>そして日本人はそのエリアの中で同価値をもったほとんどちがいの人物が群れる、曖昧さが許されるあるいは曖昧さに価値がある社会で、my wayではなく your wayで生きていくのであるという。<sup>18)</sup>彼の目には、日本人は論理を通すより、場面に自分を同化させつつ、あいまい社会の中を生きているように見えるらしい。

## VI

ここで、なぜ日本文化はあいまい文化なのか（とみられるのか）を考えてみたい。

古庄敏行は「日本はなぜ『あいまい文化』なのか」<sup>19)</sup>において、民族性はどこから生まれるのか、生命の根源であるDNAの研究から人種によって遺伝子の質や遺伝子の頻度が異なるために、それぞれ人種特有の特徴を現すことがわかってきているという。また、地理的環境による民族性の違い、学習による民族性の違いを細かに分析している。そして、それらに起因する衣食住から、日本の文化の特徴を見る。例えば、暑さ、寒さが重なりつつあいまいに変化する日本の四季、規格的な洋服文化とあいまいな和服文化（靴や鞆の規格性と下駄、草履、風呂敷のあいまいさ等）の違いを探る。

また、ヒトの心の文化については古くから次の2つに大別されている。

西洋人—客観的文化思想、東洋人—主観的文化思想

古庄は日本人は、主観的文化思想というよりは、同じ東洋人ではあるが、むしろ、印象的文化思想だという。客観的文化思想でも主観的文化思想でも、点や線で示すことができるが、印象的文化思想の場合、線でははっきり示せない。それは質的にも量的にも幅があり過ぎるからであり、見方によっては曖昧さを感じる。この観点から考えれば、私はフuzzy理論も点や線ではなく面を表現していると考えていいと思う。

また、英語が点と線なのに対して日本語は面だと考えられる。まず、表音言語である英語が直線的に相手の脳に達するのに対し、表意言語である日本語は面的に達する。さらに、英語がテニスのように、相手が打ってきた球をストレートに同じ論理で打ち返す線的言語であるのに対し、日本語はバレーボールのように内部でこね回してから返す面的言語である。

日本には、旧石器以来、北から、南から、いくつもの言葉を含む文化が伝わって来た。佐々木高明は、「日本文化の多重構造」<sup>20)</sup>において、日本でそのような文化が長年にわたって日本列島の中に堆積し、相互に影響しあって、その中から、日本文化の特色が生み出されて来たこと述べている。つまり、日本文化は、本来、多元的な起源と多重な構造を有するものであり、その受容・堆積型の文化のプロセスの中から、特有の文化の多様性や、柔軟性が生み出されて来たと考えられる。

私は「言語と文化—小説を通しての考察(1)—」の中で、欧米文化を直進pattern、日本文化を渦巻patternと名付け、色々な事例で考察し、これが両者のあらゆる文化・思考・言語に見られると述べた。直進patternが音による線文化であるのに対し、渦巻文化は視覚による面文化である。どちらかと言うと、日本人は音による論理は無視しがちで、視覚に頼る傾向があるのもその為であろう。前述の「あいまい語辞典」からの引用にあるように、日本では形をみてとることがわかるという発想なのである。次の事をアメリカ人から言われたことがある。「僕が英語のスペリングを言うと、書いたり読んだりしないのに、黒目を左から右へ動かす日本人が多い」と。せっかく視覚が発達して、読むこと、書くことが一応できて、それによってコミュニケーションする、議論をするということは不得手である。今後インターネットの普及で視覚による論理的コミュニケーション能力の発達を期待したいものである。

水谷修は「話し言葉と日本人」<sup>21)</sup>において、日本人の共存・同一化志向をあげ、例えばイエス、ノーをはっきりと言えない理由を言う。運命共同体であることを前提としている人間同士の間の話し合いのルール上相手の打ち出した言葉に対して、その意志を否定することは不可能であるが、出来る限り努力をしてそれに応じようとする。しかし実際には相手の期待に完全に添うことは不可能なので、妥協点をどう見つけだし、それを伝える表現をどう工夫するかが我々の中に存在していると言う。

金田一春彦は日本語の特色である省略の理由を二つ挙げる。<sup>22)</sup>一つは、論理的にどうというより理解ができさえすればどんどん省いてしまうということ。もう一つは、はっきり言わないということが、むしろ含みがあっていいと感じる。そういう感じ方があるということだと言う。

文化は言葉を作り、言葉は文化を作る。この文は次のようにも言い換えられる。文化が言葉を作り、言葉が文化を作る。英語では同じような文になるが、日本語の意味はかなり違う。助詞「は」はその後の動詞を強調し、助詞「が」はその前の名詞を強調する。ほぼ100パーセントあてはまる。これを「日本語は助詞ひとつで意味が変わってくるからあいまいだ」と取るか、「助詞ひとつで意味を決定できるから論理的だ」と取るかは自由だが、前述したように、日本人は「日本語は複雑で難解であいまいな言葉だから外国人になんか日本語の微妙なニュアンスはわかりっこない」と思っているし、外国人はおおむね「日本語の文法はとても論理的で体系的だ」と思っている。最近、日本語を国語としてでなく、日本語として対象言語的に捉える研究が進んで、後者の見方をする日本人も増えて来た。安藤貞雄も「英語の論理、日本語の論理」<sup>23)</sup>において、日本語は統語的にも音韻的にも論理的で体系的だと積極的に述べている。ここで言えることは、言葉や文化のあいまいさは決して非論理性を意味しているのではないということだ。論理とは客観的なものと一般的に考えられているが、日本語と日本文化を見ていると果たしてそうだろうかと思問がわいてくる。「日本語はあいまいだから論理性に欠ける」というのはまちがっているのではないかと思うのである。柳父章も「比較日本語論」の中で「『論理』(logic) ということの意味を拡張して考えてみたい。つまり、日本語における、一見非論理なことば遣いにも、日本語の論理がある、と考えるのである。」<sup>24)</sup>と言う。鈴木孝夫も前述したように「日本人の論理的考えそのものがあいまい」だと言っ

ている。

この視覚重視の面文化のあいまい論理から言えば、日本人が目に見えるものに対して細かく厳重である反面、その面の中の論理に合う限りはあいまいであるということも理解できるのである。

## ま と め

フランス人のフランソワーズ モレシャンは次のように言っている。「私が、なぜ、日本に来たと思いますか。あいまいの美德とか文化に魅力を感じ、気持ちがいいから、ここにいるんですよ。日本人の普通の人はあいまいさに自信をもってよろしい。私が日本にほれてしまった一つは独自の文化です。たとえば、ふすま、障子、生け花、借景、『間』です。あいまいさですね。略 あいまいさを上手に使いこなして行くことは、ものすごく大事でしょう。」<sup>24)</sup>

ここで、こじつけでなく、日本文化や日本語のあいまいさの論理性を考えてみる。

1. 場面对応型、又は状況依存型とも言われ、一貫性がなく見えるが、状況の論理とも考えられるのではないか。これはYes or Noの如く、点に固定するのではなく、面の論理である。
2. 個の論理より、集団の論理が優先され、「玉虫色の答申」等が是とされると、マイナスイメージが強いが、集団という面の中で個を生かす論理の一つではないか。
3. いろいろな文化を受け入れ、消化しているうちにすっかり受信型文化になって、心も肉体も受信文化に適応し、発信の危険性を回避する論理が生まれた。外部をそのまま取り込み、違うものは違うとする欧米文化、または英語にくらべ、日本文化、日本語は、元の汗もあかもすべて洗い流し混乱しない形で、同化させながらまるく受け入れてきた。対立を極力減らす受容の論理と言えよう。
4. 視覚が重視され、印象が大切にされることによって、点や線の論理でない、面の論理が重視される。
5. 運命共同体の中で鍛えられた同一性志向の論理の中に日本的思いやりが育った。それは異文化理解、異文化コミュニケーションの中でも大いに役立つものである。
6. 省略による理解と含みの中にはオーバーに言えばビッグバンの論理のエネルギーがないか。

21世紀はますます多重文化、多重文明の時代になって、あらゆる価値観が平等に共存共生せざるを得なくなってくる。そして“阿吽の呼吸”“以心伝心”に依る類のあいまいさは徐々に減少していくであろう。その頃迄にファジー理論は拡大して文化面でも応用される事になるかもしれない。そのとき、元来多元的で多重な構造の文化をもち、柔軟であいまいで包括的な面文化をもつ日本人が、世界のリーダーになれるかもしれない。勿論それには、日常の言葉の中に存在するあいまいさを自らよく認識し、国際社会の中で生きる国際人の条件と責任を自覚し実践しなければならないの言うまでもないことである。そして、人類が共に、平和で心豊かな社会を楽しめるよう、言葉を使って努力しなければならない。あいまいな日本を堂々と胸を張って論理的に主張し、コミュニケーションによって、人類的課題の解決に役立つ日本人を育てたいものである。

## 注

- 1) 浦上典江「言語と文化—小説を通しての考察(1)—」文化女子大学研究紀要第7集 1975
- 2) 竹村和久「意志決定の心理」植村出版 1996年
- 3) 福井典代, 近藤信子, 藤原康晴「服装評定におけるあいまいさの検討」繊維機械学会誌平成9年
- 4) *ibid.* 1259,
- 5) 芳賀・佐々木瑞江・門倉正美「あいまい語辞典」東京堂出版 平成8年 p.22-24
- 6) 大江健三郎「あいまいな日本の私」岩波新書 1995年 p.4
- 7) *ibid.*, p.7
- 8) *ibid.*, p.11
- 9) 大江健三郎, 河合隼雄, 谷川俊太郎「日本語と日本人の心」岩波書店1996年 p.41~42
- 10) 大江健三郎「あいまいな日本の私」岩波新書 1995年 p.187~188
- 11) 古谷和雄「心を結ぶ日本語」講談社 1991年 p.234~244
- 12) 鈴木孝夫「閉ざされた言語・日本語の世界」新潮選書 昭和58年 p.28, 84, 156
- 13) 外山滋比古「ことばはこころ」講談社 1997年 p.102, 159
- 14) 阿部数利「日本人の本音 ずるさ学」こうふく社 平成4年 p.202~205
- 15) 金鉉球「金教授の日本談義(イルボンイヤギ) 桐書房 1997年 p.227~228
- 16) 孔健 「がんこな中国人あいまいな日本人」PHP 1997年
- 17) ジョエル・シルバースティン「アメリカ人から見た日本人」ごま書房 1997年 p74,90
- 18) *ibid.*, p.152
- 19) 庄敏行「日本はなぜあいまい文化なのか」廣済堂出版 平成9年
- 20) 佐々木高明「日本文化の多重構造」小学館 1997年
- 21) 浦上典江「言語と文化—小説を通しての考察(1)—」文化女子大学 1975年
- 22) 水谷修「話し言葉と日本人—日本語の生態」創拓社 昭和54年 p.112
- 23) 金田一春彦編「ことばの研究室—日本語の特色」講談社 昭和52年 p.161
- 24) 安藤貞雄「英語の論理・日本語の論理—対照言語学的研究」大衆館書店 1986年
- 25) 柳父章「比較日本語論」日本翻訳家養成センター 1979年 p.110
- 26) フランソワーズ モレシャン 1996年3月9日 朝日新聞